Title	わたしたちは神のために力を合わせて働く者
Author(s)	西之園，路子
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume29， 2015.3 : 89-96
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5522
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

わたしたちは神のために力を合わせて働く者

西之園　路　子

一　滝野川教会

滝野川教会は今から一一〇年前の一九〇四年、聖学院神学校の構内（現在の聖学院中学高等学校の敷地内）に誕生しました。滝野川教会も聖学院も、アメリカのディサイプルス・オブ・クライストと呼ばれる教会の宣教師たちの働きと支援によって建てられたこともあり、聖学院との関係は深く、聖学院中学高等学校や女子聖学院のチャプレンの方々が協力教師として滝野川教会でご奉仕くださっています。

また、教会学校（下級科・上級科）には聖学院幼稚園、小学校、中高の生徒たちが通っています。

二　滝野川教会　教会学校紹介

滝野川教会の教会学校は、上級科（中高科）と下級科（幼小科）に分かれてそれぞれに礼拝を守っています。二

教会学校下級科クリスマス・ページェント

○一三年度の下級科と上級科を合わせた教会学校の生徒数（概数）は、男五九名、女七八名、計一三七名になります。月毎の出席者平均等については、**表1**をご参照ください。

上級科では、学校から言われ、レポートのために礼拝に出席する生徒ももちろん少なくありませんが、積極的に教会学校へ通って来てくれる生徒もいます。そんな生徒（高校生）の一人が、教会に自分の居場所を見つけ、「教会へ来ると安心できる」と語っているのを聞き、嬉しく思いました。

下級科ではクリスマスにページェントを行っています。直前練習では少し不安を覚えても、本番に強い子どもたちの演技や讃美に感動を覚えました。

この教会学校の働きを支えるために、協力教師や多くの教会員（下級科　二七名、上級科　八名、教務その他スタッフ　八名）がご奉仕してくださっています。その

教会学校上級科礼拝

担当等については、**表2**をご参照ください。

教会員の子どもたちも教会学校に通っていますが、聖学院の幼稚園、小学校、女子聖学院、（男子）聖学院の子どもたち、生徒たちが多いのが、滝野川教会の教会学校の特徴のひとつであり、恵みだと感じています。滝野川教会の教会学校に通っていると、聖学院の入園や進学に有利だと考えて子どもを連れてくる保護者もいらっしゃいますが、そういう動機から教会へ通い始めた方々の中に、後に洗礼を受け、教会員となり、アクティブメンバーとして今も教会を支えてくださっている方々もおられます（結果オーライ!?）。また教会員の中に、聖学院の教職員や関係者も多いことも滝野川教会の特色です。

表１　滝野川教会教会学校出席状況

(2013年度月毎の出席平均)

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月	平均	最大
下級科	50.5	48.3	43.0	37.5	26.3	32.5	33.0	43.8	37.3	32.3	22.8	30.4	36.5	64
上級科	24.3	21.3	50.4	25.3	25.8	29.5	37.8	17.3	22.0	22.3	10.3	4.8	24.3	68
合計	75.8	69.5	93.4	62.8	52.0	62.0	70.8	61.0	59.3	54.5	33.0	35.2	60.8	122

※聖学院および女子聖学院の中高生は、教会学校ではなく、主日礼拝に出席することもあります。

表２　滝野川教会　2014年度教会学校教師＆スタッフ

校長

下級科主任		上級科主任	
幼稚科担当教師	５名	中学科１年担当教師	２名
小学科１年　〃	３名	中学科２・３年　〃	３名
２年　〃	３名		
３年　〃	３名		
４年　〃	３名	上級科担当協力牧師	３名
５年　〃	３名		
６年　〃	３名	下級科担当協力教師	１名
奏楽者	４名		３、４名
教務担当	４名		
食事班	３名		

主任牧師＆副牧師は、時折、教会学校説教を担当。

三　課題

しかしもちろん課題がないわけではありません。

上級科や下級科の礼拝出席者は多いほうだと思われますが、現在、下級科の夏期学校は行われていません。また上級科のサマーキャンプを行っていますが、参加者が集まらず、実施できなかった年もありました。今年（二〇一四年）は春の教会学校遠足（下級科）のために、上級科に手伝いを呼びかけたところ、数名の参加者が与えられました。

学校（小学校、高校等）を卒業すると、教会学校も卒業してしまうようなところがあり、教会学校から教会の礼拝や信仰生活へどうやって繋げていけるのか、が課題です。教会としてもっと積極的に関わり、子どもたち、生徒たちを受け止めていくことが必要だと感じています。

四　静岡での経験

私は神学校卒業後、清水女子学園の聖書科教師として遣わされました。その後、清水教会の伝道師、牧師、蒲原教会の牧師として仕えている時も、講師として清水国際学園（元清水女子学園）や静岡英和学院大学短期大学部で教えていたことがあり、教会とキリスト教主義学校との協力関係について考えさせられたり、その恵みを感じたりする機会が多く与えられました。

静岡市やその周辺の市や町には、静岡英和女学院の卒業生も多く、教会員や教会学校生徒にも静岡英和女学院の教職員、卒業生、生徒が多く与えられていました。伝道において、キリスト教主義学校の果たした役割は大きいことを実感します。

五　キリスト教主義学校と教会

本人やその家族がキリスト教主義学校に通い、聖書に触れ、キリスト教に触れ、教会へ通ったことがきっかけで教会に連なったという教会員は皆さんの教会にもおられるのではないかと思います。たとえすぐには教会に結びつかなくとも、卒業後、大人になって悩みを抱え、子育てで壁にぶつかり、教会へ来て、洗礼へと導かれた方々を何人も知っています。

キリスト教主義学校で蒔かれた種が芽を出すのは先になるかもしれません。成長させてくださるのは神様です。成長しない種もあるかもしれません。それでも、クリスチャンが少数派の日本にあって、キリスト教主義学校の働きの意義はとても大きいと思います。伝道という面からも、またキリスト教の精神に基づいてこの社会に仕え、この社会を変えていく者たちを生み出すためにも。

キリスト教主義学校と教会との良き協力関係が、これからますます必要になるだろうと考えています。キリスト教主義学校がその建学の精神を維持していくのも大変な時代になっていると感じます。日本基督教団もキリスト教主義学校との協力関係を強めていきたいと考えています。日の丸、道徳教育問題等、教会もまた学校を支えるために協力できることがあるでしょう。キリスト教主義学校にクリスチャンの教職員を送り出すこともまた、教会の使

命だと思っています。キリストの福音のために、この世界が善きものへと変えられていくために、両者が共に助け合い、協力しあうことがこれまで以上に必要になってくると思います。

六　ドイツ、ノイルピンのミッションスクール

これまで何度か、日本とドイツ（旧東ドイツ側）の教会青年たちの交流に関わらせていただき、その中で、旧東ドイツ側のノイルピンという町にあるミッションスクールを訪ねさせていただいたことがあります。

ご存じのように東ドイツ時代、キリスト教は弾圧されました。クリスチャンでいることは、就職や進学にも不利になり、教会を離れた人々も多かった中、信仰を保ち続けた小数のキリスト者たちがいました。日独教会青年交流で関わらせていただいたドイツ側の牧師や信徒の方々の多くは、そのように東ドイツ時代にも信仰を守り抜いた方々であり、最初に関わった青年たちはその子どもや孫たちが主でした。

一九八九年、ベルリンの壁崩壊後、東西ドイツが統一されました。旧東ドイツ側では、聖書を読んだことがない学生たち、子どもたちも少なくありませんでした。日本の状況によく似ています。

ベルリンの壁崩壊後、教会はどのように伝道するか、どうしたら子どもたちが聖書に触れることができるかを考えました。ヴィットシュトック・ルピン教区に属する町や教会の多くは小規模で、主日礼拝を普段は二、三人で守っている教会もあります。しかしそれらの教会が協力しあって、教区としてミッションスクールを建て、教会員たちが教職員となって学校を支えました。教育レベルだけでなく、環境や、教師たちの関わり方等が評価され、その学校はドイツで最も素晴らしい学校として選ばれたことを一昨年伺いました。

先日、伊豆諸島連合修養会に参加させていただいたとき、大島の教会の牧師から、大島では、公立の幼稚園より教会幼稚園のほうが子どもたちを集めていると伺いました。歴史も長いということもありますが、子どものことを考え、公立の幼稚園の基準以上のことを行っている、子どもや親の立場になって考え、ニーズに応えていることが評価された結果です。

教会もキリスト教主義学校も共に協力しあいつつ、この時代に改めて、志やビジョンを持つことが必要なのではないでしょうか。思いや志があり、主が与えてくださるビジョンがあり、主の御心がそこにあるなら、小さな群れでも地の塩として働くことができます。社会に影響を与えることもできるはずです。

祈りつつ、キリスト教主義学校と教会が共に神を仰ぎ、人に仕える道を模索していきたいと思います。

（二〇一四年六月三〇日、「教会と聖学院との懇談会」における発題）